

日本人の志

れもの

vol.45

京都、こころここに

錦織を支える職人達

織物美術家
龍村 光峯さん



たつむら・こうほう 1946年兵庫県生まれ。早稲田大文学部卒。76年、龍村平蔵織物美術研究所(龍村光峯に社名変更)設立。日本伝統織物研究所代表理事。正倉院裂「緑地花鳥獸文錦」ほかの古代裂の復元、錦の伝統織物、緞帳などを製作。伝統技術の継承と保存、職人育成などに幅広く力を尽くす。



平成二十一年「錦—光を織る」という錦の織物をテーマとした拙著を出版させて頂いた。

欧米で評価され現代日本では忘れられて

この本を書いた動機の一つは、故郷に錦を飾るなどの慣用句や天皇の旗を意味する錦の御旗、あるいは多彩とことから錦絵、錦鯉等、古来美しいものから

名詞として人々に親しまれてきた「錦」が、欧米の専門家には世界で最も美しい織物として高く評価されているにもかかわらず、現代の日本ではほとんど忘れ去られているのでは? という強い危機感があるからである。

今日では、京都の人々でさえ、「錦」といって錦市場を思い浮かべてしまうのではないだろうか。錦とは、文字通り金に値する帛という意味で、多彩で華麗な最高の織物のことを謂う。専門的には、概ね絹糸を染め、紋を作り、手機あるいは力織機で織られている先染織物のことである。

織師に欠かせない「杼」の制作者もただ一人に

京都の西陣では、主にこの先染織物を生産している。唯、この仕事は、人の違う工程が七十数工程に及ぶ高度に専門



分業化された共同製作の世界である。この各工程を担う職人達の工房は、家庭的な規模の小企業が大半を占める。今、日本の伝統的な帯や打掛、能装束

や有職織物などの高級織物を下支えてきたこれらの職人達が、あまり世間の話題に上ることもなく、ろうそくの火が消えるように消え去りつつある。すでにいくつかの分野で職人が「最後の一人」になってしまった。この危機的な状況については、京都新聞のソフィアの欄をはじめ、折にふれ語られてきたのだが、実は益々厳しくなる一方である。

一例だけを挙げると「杼」(英語でシャトル)という、織師にとってなくてはならない道具があるが、この制作者も、ただ一人になってしまった。杼は織師にとっては料理人の庖丁のようなもので、私の工房の織師がテレビの取材で「貴方にとって杼とは何か」という質問に対し、「分身のようなもの」と答えている。それ程大切な道具なのである。伝統的な手織の先染織物、即ち錦織の世界にとって由々しき事態である。

錦織の工房を公開 危機的状況を世間に訴え

私達はこの事態を憂う有志達と共に、平成六年に錦の伝承技術の保存と育成を目的として「日本伝統織物保存研究会」を結成し、文化庁や博物館などの専門家の協力を得て、「古代織物の復元」という形で、仕事が無く生活が出来ない各工程の職人達に仕事を創出し、それをビデオや聞き取り調査などで記録するという「伝統的先染織物の総合的復元事業」を実施してきた。昨年、研究会を持続させるべく、「一般財団法人日本伝統織物研究所」を立ち上げた。今、何よりも世間一般にこの危機的状況を知らせていただくことが肝要だと考え、復元した裂や古代の高機とともに私の錦織の工房を公開し、月二回程、鑑賞会や織物文化サロンを開くなど一般の方々にも御覧頂ける機会を設けている。



料亭 本家 栗栖 晴子さん

日本の暦

5月中は「皀月の床」の呼び名もあるとか。京の夏の風物詩「鴨川納涼床」がもう始まっています。一茶通から五茶通までの鴨川右岸に、飲食店が川床の帯を形つくる景観は、他所にはない独特の風情があります。6月1日スタートだったのが、1999年から5月1日(9月30日まで)に変わりました。江戸末期には祇園祭の期間と重なる6月7日-18日(旧暦)まで左右両岸で営業、大変な賑わいだったといわれます。当時は川の中に直接、床几を置いていました。温暖化の現代、真夏の納涼床は夜でも暑く、涼風が渡る「皀月の床」は狙い目。さっそく今夜にでも。

「うれしさの余韻 日本には「後礼」という美しい習慣があります。つまり、お品を頂いた時、お食事に招かれた時、親切を受けた時などその場で言うお礼の他に、後日もう一度「この間はありがとうございました」とお礼を言う習慣です。若い世代では、おそろしく一度で事足りるので、面倒くさいと思われる場合もありますが、外国でもお食事に招かれたら翌日にカードを贈る習慣の所もあり、丁寧で美しい習慣だとわたしは思っています。すぐに言わなくても、道で会った時に「この間はありがとうございました」と、相手も一層幸せな気分になれると思います。

戦後、日本人は物の豊かさ引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

「分身のようなもの」と答えている。それ程大切な道具なのである。伝統的な手織の先染織物、即ち錦織の世界にとって由々しき事態である。

金に値する華麗・多彩な「帛」を支える職人達の灯を絶やさない



織師にとって、なくてはならない道具の「杼」(手前)。杼は「料理人の庖丁」に相当する。だが、いまも制作できる職人は、ただ一人になった。

同志社大学

- 神学部 □文学部 □社会学部 □法学部 □経済学部 □商学部 □政策学部 □文化情報学部
- 理工学部 □生命医科学部 □スポーツ健康科学部 □心理学部 □グローバル・コミュニケーション学部
- グローバル地域文化学部 2013年4月学部設置 (届出申請中・収容定員増加の認可申請中)

お問い合わせ) 広報課: 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 TEL.075-251-3120 <http://www.doshisha.ac.jp>

時空を超え継承される「志」

同志社大学の創立者・新島襄が、ある学生への手紙にしたためた一文。
「良心の全身に充滿したる丈夫の起き来らんことを」
新島襄が理想としていた青年像、それは良心に満ち満ちた曇りなきこころの持ち主であったことがうかがえます。
彼は智育だけでなく、良心をはぐくむ「こころの教育」を行うことが明治以後の新しい日本を背負って立つ人材の育成にはもっとも大切だという理念を持っていました。
良心なき逸材では、真に国の力にならないと感じていたのでしょう。大学設立趣意書にも「一国の良心を育てたい」と記しています。
この「良心教育」こそ、同志社大学の建学の精神であり原点。
私たちは、創立者が残した「志」をしっかり受け継ぎ常に問い直すことで踏み固めながら、次代に継承してまいります。

